

「第二の人生」「本当の自分探し」とも言われ、全国的に脚光を浴びる田舎暮らし。  
高山にその場所を求めて移り住んだ方々を、広報たかやまではシリーズで紹介します。

## 第七章 移住の決め手は職と住のセット 趣味も充実の荘川生活を満喫

柴田 敏幸 さん (41歳)

平成11年に当時の荘川村へ移住し、  
飛騨高山森林組合に勤務する



8月24日に荘川町一色で開催された「こだま〜れ」の関連イベントで、チェーンソーアートを披露した柴田さん



### 応援者メッセージ

#### 地域にとけこみ愛される存在

平戸 芳文さん

(飛騨高山森林組合参事)

柴田さんは根っからの荘川人より荘川人と思えるほど、地域にとけこんでいます。消防団や村芝居など、気さくに直向きに地域とのつながりを大事にする姿にありがたさと感謝をしています。

最近の仕事のノウハウを生かし間伐材のチェーンソーアートを手掛けるなど、前向きな柴田さんにこれからも期待しています！

「就職フェアで荘川の森林組合が職員募集をしていましたが、家付きの条件に即決でした」  
大阪府生まれの柴田さんは地元で会社員をしていましたが、当時の荘川村森林組合の職員募集を知り応募。採用が決定し平成11年4月から荘川で第二の人生が始まりました。移住の決め手は就職と住まいのセットだったからと柴田さん。かねてから溪流釣りをこよなく愛していたので、荘川での移住と就職が叶ったのは最高に良かったと当時を振り返ってくれました。  
除伐や間伐、枝打ちといった造林整備の作業を学ぶ研修期間の間、慣れない山仕事のかたわらに谷川の景色を眺め、魚影を目にして鋭気を養う根っからの「釣り好き」な柴田さん。「整備された人工林は本当に気持ちがいいですよ」と現在は利用間伐を担う班長として伐木や搬出の作業をこなします。  
間伐材を何とかしたいと3年前から始めたチェーンソーアートも、現在では人前で披露する腕前に。「最近ではチェーンソーの練習に余念がないです。いつかは私の作品を町内各所に飾れたら」と微笑んでいました。

問合先 移住を全力でサポート中！  
地域政策課 ☎35-3524



生産組合の組合長である下田初秋さん(写真)は、かつて「こんなに多くの方に愛されるようになって幸せだが、今後の課題は後継者だと思う。この高根の地で農業に就いて、魅力を耕し発信し、よそから人を呼び込む。そんな仲間がほしい」と語っていました。  
私にとってタカネコーンは、地域の活性化に挑む熱い心がぎゅっと詰まったトウモロコシでもあります。みなさんもぜひご賞味ください。



タカネコーンで  
活性化に挑む

高山市長 國島芳明

人口4000人を切った高根町に700人も集まるタカネコーン収穫祭。今や高山を代表する特産として、地元のみならず全国にタカネコーンのオーナーが増え、現在では都市部デパートの店頭を飾るにまで至りました。  
栽培のきっかけは平成6年。余った飛騨牛の堆肥を「何とか使えないか」と思って畑に入れたこと。トウモロコシの株を栽断し飛騨牛の飼料に与えるなど、農業と畜産の循環にも手がけました。1本の株に通常2〜3個できる実を1本だけにし、ご当地の寒暖差が旨味と甘みをぎゅっと凝縮するメロン並みの糖度を誇るタカネコーン。